

# 彼の思い出

大村伸一

002初恋

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

その女は彼の幼馴染であり、小さい頃はとてもお転婆で、いつも一緒に遊んでいたのだと話してくれたことがある。そう言いながら、少女はいつも真っ白い顔をしていて体も弱く、外で遊ぶことなどできなかつたし、遊ぶどころか一日中ベッドから降りることもなかつたことを、彼はよく覚えてもいた。

少女の病気についてははっきりと知ったのは彼に物心がついてからで、彼女の母親が話してくれたのだ。少女は生まれつき心臓がなく、生きてゆくのに血液の必要がない体質だったのだという。そのため、成長するにつれて肝臓や脾臓が衰弱し失われた。不要になった親知らずが抜けるように、それらの不要になった臓器も自然と体から排出された。ある日、学校から帰った彼が、少女の家の玄関先に季節外れのどんぐりの実を見つけた日に、彼女は脾臓をなくしたのだと彼に打ち明けた。

二十歳の頃にもまだ少女にしか見えなかつた彼女の脊髄は、皮膚の上からでもはっきりと分かるほど細くなり、骨盤と繋がる部分に至っては、今にも切れそうな糸が皮膚の下に透けて見えるだけだった。腰自体も指輪に通るほど細く痩せ、すでに補助器具なしでは座ることもできなくなっていた。

二十歳の誕生日に彼女の部屋に運び込まれたのは巨大な金魚鉢だった。両親と医師に支えられて彼女は、鉢一杯に蓄えられた水の中にゆっくりと入っていった。金魚鉢の外から見ると、水とガラスで屈折した光線によって、彼女の身体はふくらみ、年齢相応の魅力的な女性に見えたと言っていた。そして、それからずっと彼女はその金魚鉢の中で生活を続けた。

その日、二十歳になった彼は、次の日の早朝、生まれた町を旅立った。

### 003 大道芸

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

大陸でいろいろな国を彷徨い、所持金も底を尽きかけたとき、彼は公園で大道芸の一座に出会った。

噴水の噴射口から搾り出されるように現れた男は地面に降り立つと身の丈が三メートルはあり、口を開けばその顔は大空を隠すほどの大きさになり、周囲の森の木々を残らず一口で頬張ることができた。

観客はその様子を見て笑っていたが、油断をすれば自分たちもあの巨人の口に一飲み込まれていたかもしれないと、後になって気づき青ざめたのだった。

その大男を次々と片手で投げ上げて、七人の巨人を空中で回し続けていたのは華奢な体つきの顔の長い女だった。おそらく大陸の奥地の出なのだろう少しだけ肌を露出する見たこともないデザインの服を着て軽々と巨人を操る様子に、初めは拍手喝采していた観客も、やがてそれが一時間あまり続くと飽きてしまい、ほとんどの者が立ち去った。

彼を除いて見物が誰もいなくなったとき、どこかで見たことのある顔と体つきをした男が噴水の裏から現れた。男は、彼にもっと近づくように身振りで示し、近づいた彼の目の前で噴水の水を一掬いして、その中から金魚を一尾取り出して見せた。

素早く掬い上げられた金魚は、自分がまだ水中にいると思い込み、男の手のひらの上から空中に泳ぎ出す。水の代わりに鰓で空気を吸い込み続けた金魚は、ものの三分程で体内の水分子がすべて空気に置き換わり、空中で生活することに適応してしまっていた。

驚いて見ている彼の方に空中を泳ぎながら近づくと金魚は、彼の胸ポケットに潜り込み、その中から彼の目を見つめていた。彼が、パン屑をひとつまみあたえようと、金魚は、幸せそうに目を閉じて眠った。

そのとき、突然拍手が起こった。立ち去ったはずの観客が戻って来て彼に喝采をおくっていた。彼は、すこし戸惑ったが、さっき金魚を掬い上げた男は、他ならない彼自身だったのだと思いついた。

そんなふうにして、彼は、大道芸の一座の一員となった。あるいは、一員であったことを思い

出したらしい。

#### 004 蝶

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆきただけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

彼が自分の右手の手の平を空中でゆらめかせ、自慢げに言うことには、彼の右手の前世は蝶であり、今でも飛行する夢を見て目覚めると、右手は手首を振り切って空中を浮遊するのだという。

夢で蝶が集めた花の蜜は香しく、鱗粉に染み込ませ空中に振りまくと、あらゆる生物はその香りに夢中になり、蝶の言いなりになるのだ。

だがその後、彼の右手は凋落した自分の運命を恥じてか、あるいは他の生き物を狂わせることに罪を感じてか、手袋の中に身をひそめ、一生素手になることはなかった。

#### 005 信仰

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆきただけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

彼が海外での長い放浪の旅から帰って来た直後、彼にも強い信仰心があったのだと言う。勿論、事実とは思えなかったが、彼が見せてくれたその頃の写真には、確かに生真面目な顔をして祈りを捧げている彼の姿が写っていた。

彼が訪れたその国では、国民は皆その神を信じていた。彼は神よりも、若い娘の豊かな胸や腰の丸みの方に興味があったのだが、その胸や腰は異教徒に触れられることを禁じており、かといって他の国の乳房や尻に触れようにも、ひとたびその国の土を踏むと、離れることは敬虔な信者以外に許されていなかった。致し方なく彼は入信し、身近な女達の身体の表面や内側に触れることに成功した。

満足を得てから改めて彼の信仰の対象である神について確かめると、その神は信者の存在など知ることはなく、勿論彼らの幸福などまったく気にかけおらず、いわんや彼らの願いをかなえるなど考えたことすらありえない、そんな神なのだという。

それほど何の役にも立たない神を信じる者が果たしているものだろうかと彼も最初は思っ

たのだが世界に何億という信者が存在し、その信仰心は強固でゆるぎない。ひとたびその神への信仰の道に入るならば、異教に改宗する者は一人もいないのだという。

彼はすでに大きくて弾力のある乳房も柔らかくて指を吸い込むような尻も幾度となく味わい満腹していたので、その教義を聞いても失望することがなかった。それどころか一瞬考えた後で、彼はかくもわがままな神を許しさえした。結局、俺とは無関係だということだからな。そう言って彼はその後もその国で何年かを過ごし、神の無関心を堪能した。

思い出話の後で、神を許してからは、不思議なことにはいかなる苦悩も存在しなくなったのだと、彼は言った。彼にとって信仰とは、若い娘の肉体に等しい存在だったのだろう。

もう一度見直すと、写真の彼は祈っていたのではなく、人にわからないように笑いを噛み殺していただけたようにも見えた。

#### 006 犯罪

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

その長い生涯に渡って彼は幾度も投獄された。記録を辿ると彼は、この町に収容施設ができる何年も前から投獄されていたことになっている。彼が生まれる二百年前のことだ。その真相を尋ねると、真実については話せないのだと、彼はいつも嬉しそうに答える。

獄中で最も長い期間を過ごした彼の罪状は性に関する犯罪で、未成年の少女を騙し自らの快楽に供じたのだという。彼は少女たちを、僕の金魚ちゃんと呼び、少女たちはそう呼ばれるたびに苦笑を浮かべていたと、被害者の匿名の供述書には書かれていた。

現行犯で捕らえられた彼は、部屋の中央で全裸のまま、まだ十センチにも満たない金魚を全身にびっしりと貼り付け、恍惚とした表情で立っていたという。そして、金魚の尾びれが彼の肌を鞭打つ度に、激しく射精を繰り返して、果てることがなかった。

その時の様子を録画したビデオは闇で売られたのだが売れ行きはさっぱりだったと、テレビのインタビューで目を隠したバイヤーが話していた。

#### 007 梯子

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

彼が世界の国々の遍歴を始めて一年が過ぎたころ訪れた有名な広場で、彼は空中に浮かぶ大勢の男たちを見て驚いたという。一人で浮かんでいる男ならどの国にも何人かはいるものだが、その広場では空が見えなくなるくらい大勢の男が空に浮かんでいたのだ。しかも、痩せた者だけでなく太った者もいる。

彼がその広場にテントを張り、三日間観察して明らかにしたところによると、毎朝、男達はそれぞれの背中に梯子をかついで、この広場にやってくる。そして、具合のよさそうな場所を見つけて、背中にかついでいた梯子を空中にたてかける。梯子はバランスよく作られており、壁も木もない空間に二つの足だけでしっかりと直立するので、男は直立させた梯子をするすると登りすぐに上端に到達する。梯子の頂上の具合を確かめ、独特の動きで位置を定めて座った男は、やがて呼吸を整えると手をゆっくりと下に伸ばして、それまで登っていた梯子をはずしてしまうのだという。

梯子をはずした後の男の姿しか見ていない人には、男がどのように空中に浮遊したのかが分からず、驚くのが多かった。

#### 008 左手の場合

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

彼の左手はというと、これもやはり前世は蝶だったのだが、よく見れば左右が裏返しになっている。裏返しということは左手が空中を飛んでいるように見えるとき、実はその手のひらは空を映した鏡の表面とガラスの隙間を飛んでいるということだ。前世と今生の間のどこかで湖か海の水面を通過したときに、波に触れて裏返ってしまっただろう。

もしも通ってきたのが湖なのか海なのかを確かめたいならば、左手の手のひらを舐めてみることだ。湖を通ってきた蝶は何か引き裂かれた獣のような味がし、海を通ってきた蝶は恋人とのひとときを終えたばかりの娘の味がする。

とはいえその味を区別できるようになるためには、あと三回は輪廻を繰り返す必要があるの

だが。

#### 009月夜

久しぶりに夜のことを思い出したので、夜のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

鉄道では行けないある国に彼がしばらく滞在したときのことだ。その国はいつも真夜中で、星すら一つもなく、漆黒の天の中央、どの国民の頭上からも等しい距離に満月が輝き、すこしも動くことがなかった。夜空に満月を隠す雲は一片も浮かばず、雨は雲からではなくその月の光の中から生まれるのだと、教養の高い人々ですら信じていた。彼の滞在中、二度だけ降った雨は、確かに水ではなく、月の光でもあるかのように儂い音を立て、手のひらに受けるとすぐに碎けて消えてしまった。

その国には砂漠と森と海があり、砂漠と森と海の交差する場所に、一軒の家が建っていた。人々はその家のことを、この世の終わりの家と呼んでいたが、何故「この世の終わり」なのかは、誰も理由を知らなかった。その家の主についても諸説あり、ある者は記憶を無くした魚であるといい、また別のある者は永遠に孵化することのない卵であるという。そのような憶測は人を伝わる内に次第におかしなものになり、整理券の束であるとか、あの満月の失った記憶だとか、意味の分からないことを言い始める者もでてくるのだった。そうなると、妄想に歯止めをかけることなど不可能で、ついには国語辞典の項目が日替わりである家の主になっていると、誰もが信じるようになっていた。

「わんひたまひ」がこの世の終わりの家の主になった日、「わんひたまひ」は国語辞典の最後の言葉だったので、明日はこの世の終わりが本当に来るのだと、誰もが怯えて自分の家の夜よりも暗い部屋の奥に隠れていたのだった。

「わんひたまひ」が次の主に代わるちょうどその時刻、彼の乗り込んだバスは甲高いクラクションの音とともに国境を越えたので、その後その国がどうなったのかを彼は何も知らない。

#### 010占い師

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

彼が故郷を捨てもう初恋の女性の顔もよく思い出せなくなった頃、夜が昼と混じり合い分離できない地方で車を降り、一人の女と出会った。

女は自分を占い師だと言い、一度交われば一つの未来を教えると約束した。性的な活動にはやや臆病な彼だったが、未来についてはひとかたならない興味を持っていたので、やむを得ず占い師を抱くことにした。

最初、女の身体は鉄でできているかのように硬く冷たくそして重かった。そのため占い師の錆だらけの体に触れるたびに彼の腕や胴にたくさんの擦り傷やアザや噛み痕が生まれた。だが、彼は未来への強い好奇心に突き動かされて、夜も昼間も少しの中断もなく占い師を抱き続けた。占い師がとても美しかったということにそのときは気づいてすらいなかったのだと、半ば弁明するように彼は告白している。なかなか信じがたい言葉ではあるのだが。

そのように抱き続けていると、幾日もかからずに女の身体は水銀のように柔らかく激しく反応するようになった。水銀に皮膚を焼かれるのは苦痛ではあるが、それも限度を越えると逃れがたい快樂に変わる。そう彼は言っている。

そして女は絶頂をむかえるたびに一つの占いを彼に告げた。幾つの予言が語られたのかは分からないし、その中の幾つが現実になったのかも、彼は明かしはしなかった。彼にも区別がつかなくなっていたのかもしれない。

## 011 蛇口

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

彼がある公園で水を一口飲もうとした時、水飲場には先客がいた。

それは見たことのない女で、水飲場の水道の蛇口を抱いて一日中温めている。掠れた声で歌っているのは子守唄だったと思う。

水飲場から離れない女の望み通り、いずれ蛇口から何かが産まれてくるのは間違いのないことだ。だが、女が蛇口を咥えて口から離そうとしないので、産まれてきたものはすぐに女に食べられてしまうことになる。

## 012 ボクサー

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

大型客船には娯楽のための施設がたくさんあるが、深夜に行われる賭け試合ほど興奮するものはないのだと彼は言いながら、その興奮を思い出すのかこぶしを握りしめる。

夜毎組まれる試合には、ボクサーやプロレスラーはもとより、テンコドー、ジュージュツ、ムエタイ、サンボなど有名な格闘技の他にも、彼の故郷で発祥したという武術や、縛られたままで相手を倒すという奇妙な技まで、ありとあらゆる種類の格闘家が登場し、誰が勝利するのかいつも予想が難しかった。そのうえ、水中での戦いであるとか揺れる救命ボートの上での戦い、あるいは鯨の鼻腔の中での戦いなど、旅客船ならではの趣向をこらしていたので、乗客達はさらに盛り上がるのだった。

毎晩行われる試合で、多くの格闘家は傷つき、中には深手を負い二度と戦えなくなるものもある。それなのに、一ヶ月以上の航海の間、夜毎、試合は繰り返され、参加する格闘家が尽きることはなかった。この催し物のためだけに百人以上の、いわくつきの格闘家が船底に逃えられた個室に住まわされているらしい。大型客船ではいつものことだと、痩せたボーイが訳知り顔で教えてくれた。

彼のお気に入り顔見知りのボクサーで、航海の間一度も負けたことがなかった。その戦いぶりもみごとにあり、相手が仕掛けてくるパンチやキックは決して彼の体に触れなかったし、腕や足に組み付こうとぶつかって来られても、つかまることなど一度もなかった。寝技に入る前に戦いは終わったし関節を取ることなど不可能だ。

なにより観客を感動させたのは、試合の間に彼のふるうパンチがただ一度だけだということだ。その一発のパンチだけで対戦相手の戦闘機能は崩壊し、間違いなく一生立ち上がれなくなる。そのとどめのパンチも、渾身の一撃というよりは、軽く触れているだけにしか見えないう。試合の後で一緒に食事をするのも何度かあったが、そのボクサーはウォーミングアップした直後のような汗はかいていたが、他の戦士が戦いの後にみせるような闘争心の残滓はどこにも見られなかった。

船旅の最後の夜、そのボクサーの対戦相手はまたボクサーだった。長い旅の間、その対戦相手の名前は一度も深夜の戦いに登場したことはなかったが、リングに上ったその姿を見て、誰もがこの最後の夜にふさわしい相手だと理解した。



リングの上で向かい合う二人は、トランクスの色は金色と紫色で違っていたが、それ以外はまったく同じだったのだ。そっくりの顔に坊主頭は同じ骨格、筋肉のつき具合も瓜二つだった。それだけでなく、向かい合う二人は同じリズムで呼吸をし、同じタイミングで瞬きをした。鼓動もまったく同じ時を刻んでいることを、見ている誰一人疑わなかった。それでもその挑戦者が、鏡に写った映像でないことは、左右が逆になっていないので明らかだった。

対戦カードの意外さに観客がどよめいている中、試合は始まった。ふたりのボクサーが同じタイプの戦い方をするだろうということを疑う者はいなかった。そして、それは正しかった。どちらも、まったく動かず、向かい合ったまま勝利に届く唯一のチャンスを待っていたのだ。

しかし、試合はそんなに長引きはしなかった。試合が始まって五分のアナウンスがリングに響くと同時に、二人はまったく同じタイミングでいかにものんびりとした様子で腕を引き、それから相手の額に向かってその腕を伸ばした。二人は相手のパンチを完璧なディフェンスでよけたが、放たれたパンチ自身は一直線に相手に向かって進み続けた。そして、リング中央の何もない空間で、二人のグローブがぶつかった。

ぶつかったはずだったが、その瞬間、二つの拳はそのまま溶け合うように一つになった。そして、パンチの衝撃が、融合した拳を脈打たせ、その大きな鼓動のような脈がそれぞれの腕を波打たせて肩に伝い、肩から首、顔あるいは背中から腰、下半身へと、大きな波紋になって体中に広がっていった。その波の力は二人の男の身体を限界まで引き伸ばし、引き伸ばされた身体は大きな布のように薄く広がる。融合したグローブを中心に繋がった二枚の布には、トランクスの色や二人の血液や肌の色が混じった、大きな目玉の模様が描き出されていた。

二人のボクサーの心臓は布のどこかで平らになっていて、それでも鼓動を打っていた。そして、鼓動の度に布は何かの羽根のように震えた。初めはバラバラに震えていた布も、やがて、二つの布がリズムを合わせることを覚えると、二人のボクサーは大きな羽根を持つ生き物になり、その身体を宙に舞い上がらせた。それからその生物は船の上を飛び越えて、マストのまわりを五度廻り、やがて船を離れて行った。

その飛び去った方向は、すぐ近くにまで来ていた陸地とは正反対で、そのせいか、だれもボクサーの後を追いはしなかった。

試合は無効になり、胴元は儲けることができなかったはずだが、少しも悔しそうには見えなかったと、彼は最後をそう締めくくった。

### 013 心臓の場合

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆきただけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

彼の心臓の前世はヘビだった。

白ヘビであり、木の洞に住んで二百年ほど生きていた。死ぬまでにはずいぶんおおきくなっていたという。

そういう素性なので、彼の心臓は暑い所が苦手で、動くことさえおっくうがっていた。

心臓があまりにも怠けるので、彼は心臓を交換してもらったのだという。新しい心臓の前世はハツカネズミで、彼が死んでずいぶんたった今も、休むことなく動き続けている。

### 014 骰子

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆきただけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

彼は生まれてからずっと、骰子を振るといつも同じ数しかでないのだという。

その数は五で、骰子を一つ振っても二つ振っても、三つでも四つでも、でた目の数を合計すると必ず五になる。骰子を六つ振ればさすがに五にはならないだろうと言ったのだが、それにははっきりとは答えてくれなかった。

### 015 かけがえのない医者

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆきただけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

医師免許も持たず、そもそも医者になろうなどと思ったこともない彼だが、大陸の南部にある小さな町で、彼は国定医師に任命された。その町に医者になりたいなどと願う者が一人も居ないところに、無一文の彼が偶然来合わせ、食べるためには医者になるしかなかったのだと、何か言い訳をするかのように彼は言った。

医師になって分かったのだが、その国の医療技術の機械化は世界でも比類がなく、病気の診断はもとより、簡単な骨折の手当から、内蔵や神経の複雑に絡み合った高度な手術まで、すべて機械が完璧に遂行し、失敗することはないのだという。勿論、心の手当であっても、人間が行うよりも的確に倦むことなく面倒を診るので、その国の国民でなにか病を患っている人間は常に十人を超えることがない。

ミキサー車に誤って飲み込まれ、肉と骨のミンチになった男が、機械治療によって元の身体に戻ったという噂さえあった。勿論、そんなことはどれだけ技術が進もうともありえないのだが、実際の手術を一度でも目にすれば、あながちそれも嘘ではないように思えてくるのだった。

そういう国なので、医師とはいえ、彼が実際に患者の手術は勿論、診察をすることもなかった。彼がその町で医師をしていた一年間、彼は毎日、命じられた通り、机の上に積み上げられた名簿の名前に、適当にマルとバツをつけ続けた。それが、国定医師の仕事だったのだ。

医師としての最後の日、彼は名簿の最後に、自分の名前を見つけた。訝しみながら彼はそこにマルをつけ、ペンを置いた。その直後、呼吸もできないほど胸が苦しくなり、意識を失って倒れた。

すぐに機械医師による診察がおこなわれ、心臓の問題が明らかになり、手術が実施された。それには十時間以上もの時間がかかったのだと、後で彼は教えられた。この町始まって以来、最も長い手術時間だったという。

手術は成功し、一週間の経過観察の後、彼は退院を許された。入院している間、元国定医師の権限で、自分以外の入院患者のカルテを見た彼は、彼と同じ日に入院し死亡した患者の名前は、あの名簿で彼がバツをつけた名前と同じだということに気づいた。

偶然だと思うがねと彼は言って、それ以上、その国の話をするとはなかった。

#### 016 海底楽団には欠員があります

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

深海に住んでいると、水圧で圧縮された高濃度の酸素を呼吸することになるので、住民はお

しなべて教養がある。博物館や美術館、それに音楽ホールがたくさんあるのも、住民の教養の高さを示しているのだろう。

古典的な楽器はみな、海底の高濃度の酸素の中で演奏をすると、他所では聴くことのできない繊細な音色を奏でるのだと、彼は懐かしそうに話した。

海底で最も素晴らしい演奏を聞かせてくれる海底楽団には二十三名の楽団員がいる。彼らはみな陽気で、すぐに服を脱ぎたがる。全裸で演奏すると楽器の振動を直に感じられて、自分が音楽と一つになったように感じるのだ。誰もが決まってそう言った。

だが、そんなふうに演奏をした翌日には、その演奏家は必ず姿を消してしまう。書置きも残さず、楽器だけを置いていなくなるのだ。

海底楽団には、持ち主のいない楽器がたくさんあり、いつも新しい楽団員を求めている。

#### 017 鰐の驚愕を知る

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

熱帯のある国で道に迷い、気がついたら周囲を鰐の群れに囲まれて、泥と蛭の混ぜ合わさった川で立ち往生したことがあったのだと言う。

鰐に食われてしまうのではないかとしばらく動けずにいたのだが、どうも鰐は彼を遠巻きにして近づこうとしない。それよりも、逃げようとしているようにすら見えた。しばらくすると、鰐の姿は消えて、彼は無事に川を渡ることができた。

向こう岸の渡し守にその話をする、川上で生まれたばかりの鰐が川を下り、海に出て行くのだ。運がよかったと言ってくれた。

海に出た鰐の皮には止めどなく海水が染み込み、その身体は何十倍もの大きさに膨れ上がる。海面を転がってゆく大きな岩を見たら、それが鰐である。

### 018 三メートルの島

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆきただけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

旅の途中で船が難破し、無人島に一人漂着したことがあるのだという。

その島ではあらゆる動物の身の丈が三メートルになっていたそうだ。そして、なんと、彼自身もその島に漂着した翌日には身長が三メートルになり、いつもとずいぶん違った景色が見えたそうだ。

島に住む象やキリンも、自分と同じ背丈しかないと、かわいいペットのように見えるものなのだと言う。

森の奥に住んでいたヘビの場合は、頭から尻尾までの長さだけでなく、胴体の直径も三メートルになっていて、大きなずんぐりとした円筒形であり、どうみてもヘビには見えない。ライオンやオオカミも三メートルの巨体になっていたが、その島で恐るべきはそういった獣ではなく、ノミだった。三メートルのノミは、一度ジャンプすると、雲よりも高くまで跳び、その高度から、一直線に獲物の身体に襲いかかる。そして強靱な足で獲物を掴み、どんなに凶暴な獣も逃がさない。そして、捕えられた動物は身体中の血液を吸い取られて死んでしまう。

生き残れたのは、殺虫剤とこの知恵のおかげだよと、手で頭を叩いて彼は笑った。

やがて、救援が来てその島から離れると、彼は元の身長に戻ったそうだ。その島がどこにあるのか、今ではもう分からないのだという。

### 019 断食株式会社

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆきただけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

彼が諸国の遍歴から故郷に戻り海に面した小さな家で静かに暮らそうとしていた頃のことだ。外国から来たある僧が半年の間断食を続けて話題になった。

すでに世界のどこにも戦争はなく、暴力による支配も過去のものになったというのに、何のために断食を続けているのかと、誰が尋ねても僧は答えなかった。おそらく空腹のあまり何

も話せなかったのだろう。

理由がどうであれ、その僧のせいで断食が流行し、ついには会社までできたのだという。断食セミナーを開催し、断食グッズの販売、断食本の出版で大儲けをしたところまではトントン拍子に会社は大きくなった。一部上場を果たしてからも、断食演歌や断食アイドルで芸能界に殴り込みをかけて順調に見えたのだが、断食食品を売り始めたあたりから怪しくなり、最後は社員一丸となつての無期限断食マラソンで死者を出し、そんな正気をなくした経営ぶりに警察の手入れがあり、あっけなく会社は倒産した。どうも、断食売春にまで手を染めていたらしい。

逮捕された社長は自らも断食マラソンに参加していたため、栄養失調で骨格模型のように痩せていたが、裁判では有罪となり、投獄された先が彼と同じ監獄だったのだという。

あいつは監獄でも一切食事を摂らずに断食を続けていた。そのせいか、俺よりも先に釈放されたんだ。そう彼は、話した。

あの断食僧は、その会社が倒産した頃には、何かを悟つたのかとつくに断食をやめていて、南の方のリゾート地でかなり大きなお寺の住職になっていたのだという。

## 020 海のささやき

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

海というものは、人間存在の根底にかかわるものだ。彼は、そう言って上着を脱いだ。

大陸の奥地に向かうと決めた夜、宿の主人はいいものをやろうと言って、彼を外に連れ出した。四六時中、岸に打ち寄せる波の音の聞こえる宿だったから、歩くというほど歩かない内に海辺に出た。よく晴れた夜で、空の最も高い位置にいつものように満月が浮かんでいた。月の光は夜の隅々までを浮かび上げらせ、深海で生まれた泡が瞬間に育ち、喉を鳴らして叫びながら砂浜に殺到して来るのがよく分かった。

夜のすべてがあまりにもくっきりと見えたので、不審に思つて宿の主人を見ると、そんな疑いなど気にも留めず、主人は彼に後ろを向くように促した。

彼には音しか聞こえなかったのだが、何か大きな紙を破り剥がすような音がしたかと思うと、次の瞬間、彼の背中に冷たいものが貼り付けられた。驚く彼に、心配することはない、すぐに本来の温かさがもどってくるからと主人は言い、確かに数分もしない内に背中が温かくなった。

宿に戻ると言い歩き出した主人の後について、海辺から遠ざかりながら彼は、一度だけ振り返った。すると、海があった空間はまったくの闇に変わっていて、彼は、自分の背中に何が起きたのかをおおよそ想像することができた。

それ以来、彼は、どんなに山奥に入っても、幾日砂漠をさまよっても、一度として命の危険を感じることはなかったのだと言う。

彼が上半身裸になり、ほら、と言って見せる背中には、巻貝の化石の模様があるだけだった。

## 021 声の場合

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

海の近くの小さな家に一人で住むようになって、彼は歌の勉強を始めた。ボイストレーナーを呼び、対位法やブルーノーツを研究し、自分で作曲をする才能もあったのだが、それはとある専門家に任せ、生まれつきの豊かな声量を活かしたバリトンで、彼は国際オペラ座でのデビューを果たした。

そのときの写真を彼自身は一枚も持っていないが、音楽図書館には展示室があるほどで、それをみれば、誰もがこの人かと思い出すだろう。

彼が帰国を決意する二つ前に立ち寄った国には、巨大な風車が幾つもあり、その中でとりわけ大きな風車の三枚目の羽根は、誰も知りしなかったが、その生涯をかけて呼吸についての研究を重ねていた。風を受けるとはそういうことだ。というのが羽根の口癖だったのだが、羽根は声帯がないので、その言葉はだれにも届かなかった。ある夜、恐ろしい嵐に襲われ風車が破壊されたとき、ただ一枚折れた羽根がその三枚目の羽根であり、その後、羽根は彼の声として生まれ変わった。

彼は、自分の声の前世についてそう説明すると、自室の窓から身を乗り出し、口いっぱい風を受けて回転して見せてくれた。誰にも反論出来ない証拠として。

## 022 地下鉄レジスタンス

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

最後の戦争があった町で、彼はレジスタンスに加わっていたのだと告白したことがある。

地上はすべて破壊されてすでに百年が経ち、町のすべては地下に再建されていた。都市の唯一の交通手段である地下鉄は、地面の下に縦横に穿たれたトンネルの中を走っていた。あまりにも多いトンネルによって土地が陥没しないように、トンネルの中には透明な油が満たされ、列車はゆっくりと駅と駅の間を移動する。地下鉄からあふれる高価な油のにおいが地下都市のあらゆる場所に漂い、初めてそこを訪れた者は、油に酔って数日は動けなくなるのだという。

トンネルはしばしば垂直であり、列車はそれに沿って昇ったり降りたりを繰り返す。しかし、トンネルに満たされた油によって、乗客は誰一人、今どこに向かって走っているのか気づかない。

さて、レジスタンスは常に戦闘地下車両に乗り込み、攻撃プランに従って、敵の補給基地へと送り込まれる。彼が戦っていた半年の間、そこは決まって無人の廃墟であり食料さえ、ほとんど蓄えられてはいなかった。

報告を受けて、レジスタンスの本部はいつも、それこそがレジスタンス活動の戦果であり、勝利はあと少しだと伝えてきた。奪取した僅かの食料を受け取りに来る連絡部隊の面々は、鼻が尖り、毛深く、口臭も生臭い。彼らを見るたびに、戦いは百年前に終わっているのではないかと言いたかったが、時代がその言葉を封じていたのだと、彼は悔しそうに語った。

彼がその町を離れた日、彼は地下鉄の油を一瓶だけくすねてきた。だが、数年ののち故郷の町に戻る旅の途中、瓶が割れ、油は海に散逸してしまった。



### 023世界の終わりから来た男

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

彼は、時々、世界の終わりから来た男のことを話してくれた。

その男は、自分のいた世界では、あらゆることが可能なのだと言った。あまりにも可能性が多すぎて、その中から一つを選ぶことが誰にもできなくなり、世界は終わってしまったのだとも言った。

それを聞いて、そんなバカなことはありえないと彼が言うと、その通りだ。その世界はあり得なくなって、存在を終えたのだと、男が答えた。少しも笑わない男が冗談を言っているようには見えなかった。

彼が、それではどうやってこの国に来たのだと聞くと、男はこう答えた。

「世界が終わると同時に、私はどんなところにも存在するようになってしまった。無限と間違えるほど多くの場所に私は立っていて、目の前を誰かが通り過ぎるのを待っている。目の前に誰かがやって来ると、私はその者のことをすべて思い出すのだ。私は世界に起こるすべてのことを覚えているが、思い出すのには時間がかかる。目の前にいた者のことをすべて思い出した頃には、その者はもうどこにも存在しない。

私の前にやって来る者などほとんどいないが、もし来たとしてもたいていの者は私に気づかない。たまに、君のように私に気づく者がいると、決まって様々な質問をする。

その質問を尋ねられることはずっと以前から知っていてそれにどう答えるのかもすべて分かっているのだが、問いかける者たちはみなせっかちで、答えを聞く前にいなくなってしまう。

君もまたそんな者のひとりなのだろうな」

その男の言い分はつじつまの合わないことばかりで、彼は男が望むように何かを尋ねることはしなかった。それが男に気にいられたのか、別れるとき男は少しだけ微笑んだように見えた。

「世界の終わりなら世界のあちこちで見て来たが、終わりになると必ずおかしくなる奴がでてくる。そしてあいつらは、みんな同じ顔をしていた」

と、彼はうんざりとした口調で言った。

#### 024 無限語録

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

人はよく無限という言葉を使うが、実際に無限を見た者はそんなにはいない。

彼が海辺にある街の雑貨屋に入ったときのことだった。入り口は灯りも少なく、よく見なければ店だということさえ分からない作りだったが、中にはいると体育館ほどもあるフロアには、近隣の港からも来たのか船乗りが大勢いて、店内はまるで深海のように性器と塩素の匂いに満ちていた。

半月前からどこの港町でも雑貨が流行していて、このごろでは大きな店はどこも在庫がなくなり、今週に入るとうちみたいなちいさな店で掘り出しものをさがす人が増えてきたというわけさ。店の店主は坊主頭で照明を反射させ、万引きをしようとする客にスポットライトを当てながら、そんなふうに話してくれた。

彼は特にお目当ての品物があるわけでもなく、店の中をぶらついていただけののだが、「はじまりとおわり」と大きな文字で書かれたカードの貼られている棚の前で、その男と出会った。

そのとき男は棚から眩しいほど輝く宝石を手にとったところだった。だれにでも手の触れられるそんな棚に本物の宝石が置いてあるはずはなく、男の手の中で宝石は一瞬焔をあげたかと思うほど眩しく輝いたあと、光を失い黒い塊に変わった。男はもはや宝石とは呼べない黒い石を棚にもどして、彼の方に振り向いた。

まずいことが起こったかと思い、店主の様子を見たが、店主はそれには気づいていないようだった。男は彼が見ていたことに最初から気づいていたのかもしれない。黒く変わった宝石の粉を払うように手を叩くと、彼の方に近づいてきた。

彼は関わりになりたくなかったので立ち去ろうとしたのだが、男は一瞬で彼の前に立ち、話しかけてきた。

「永遠に変わらないものは醜い」

彼にはそれが質問なのか、それとも男の考えを述べただけなのか区別できなかったのも、なにも答えなかった。すると男はこんなふうにした。

「永遠の前では瞬間も歴史も同じことだ」

男はコートの内ポケットから、手袋をした手で小さな黒い表紙の本を取り出し、彼に押し付けてきた。その本の表紙には金色の文字で「永遠語録」と書かれていた。男がそんな売れそうもない題名の本の販売員だということはすぐに想像がついた。その本の作りの洗練されていないところをみると、自家製本だったのかもしれない。彼がその本を返そうとしても、男は断固として受け取らなかった。だが、本の代金を要求することもなかったのも、本は売り物ではなかったのだろう。

## 025 虫の村

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

その村に着いてしばらくすると、彼は自分が虫になっていることに気づいた。

森を抜けて村のはずれにある民家に着く頃には、眠くもないのに腹ばいになり、土の湿り気を感じながら歩いていた。土は甘酸っぱいにおいがして、思わず舌を伸ばして地面を舐めたいという欲望がおきるので、それを止めるのに苦労しなくてはならなかった。後から思えばどうして地面を舐めるのにあんなに抵抗したのか、さっぱり分からなかった。虫でないということとはまことに奇妙なことだ。

自分の腕がいつもと違って地面に触れても冷たさを感じず、体を引き摺っているのに少しも疲れないうちに気づいたとき、彼は生まれつき虫であったかのように、自分が虫であることを思い出した。体の両側から生えている小さな無数の足は、自分の意思とは無関係になめらかに運動して、彼を望みの場所に運んで行った。木の幹は、手足がうまくひっかかり、垂直に伸びる道を彼は何のためらいもなく登った。木の上はゆつたりと彼の体を支え、気持ちの良い休憩場所だった。それまで道しか歩いていなかったことが、とても愚かだったように思えた。

木の上で休んでいると急に空腹になったが、自分のまわりにある木の葉はすべて食べ物だった。好きなだけ食べて好きなだけ眠ることができる。虫であるとはそういうことだった。

そのまま木の上で蛹になり何か想像もつかない存在に変わるのだろうと思ったが、彼にはしなければならぬことがあったので、名残惜しかったが木から降り、村の中に入っていった。

民家はそんなにたくさんは建っていなかったが、どの家にも、屋根の上や壁に見たことのない平べったくて大きな虫が貼りついていて、それが村人だったのだろう。彼はゆっくりと近づくと、頭から伸びている触角を相手の触角とかすかに触れ合わせた。

村人はみな親切で、迷うこともなく、彼は村に住む年老いた虫を探し出し、預かっていた手紙を渡した。

約束を果たした彼は、それから、その年老いた虫の家の横の大きな木の中ほどに登り、蛹になった。そして一週間そこに留まったのち、羽化すると大きな羽根を伸ばして飛び立ち、村を離れた。

それから幾日たった後かは分からないが、村から山一つ超えた林の中で、通りがかった猟師に、全裸で眠ったままの彼が発見された。

彼が届けたものは、旅で知り合った若者が両親に宛てた手紙だったのだという。その若者は鳥をひどく怖がり、家から一歩も外にでなくなって死んでしまった。死体の腹からは銀色に輝く大量の鱗粉が後から後からこぼれ落ち、青年は死ぬまでずっと蝶を食べて生きていたらしいと診断された。

奇妙な話だったので、彼は若者に託された手紙を故郷に住む両親に届けたのだ。

後にも先にも、虫になったのはあの村だけだと、彼は懐かしそうに語った。

## 026 村の楽団

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

その村には楽団があり、若者が大勢参加していた。

管楽器は勿論だが、弦楽器の演奏家がとりわけ多いようだった。

バイオリンやピオラなら二人で演奏することもできるのだが、コントラバスは村で一番大きな楽器であり、特に大勢で吹かなくてはならない。コントラバスのある編成で演奏をする日には、大勢の若者が駆り出され、舞台の上は大層賑やかなことになる。少なくとも六人、多ければ十五人ほどがコントラバスに群がって、すこしずつタイミングをずらしながら頬を膨らませ、ゆっくりと楽器に息を吹き込んでゆく。弓を滑らせる演奏者はクジにはずれた一人であり、息を吹き込めないことが悔しそうに、空中にむけて口を尖らせ、自分も一緒に吹いている真似をするのだった。

熟達した演奏家なら、吹き込む息に合わせて楽器が普段の三倍くらいに膨れて見えるというが、それは錯覚に違いない。楽器はとりわけ硬い木でできており、呼吸程度で膨れたりするはずがないからだ。それでも、呼吸によって演奏者と楽器が溶け合い一つになれば、呼吸は楽器の表面を摩擦熱でわずかだけ溶かし、反射する光を紫にあるいは赤く変える。演奏を聞きにきた人たちは、色が変わった光のカケラを我先に奪い合い、うまく手に入れた者はそれを逃さないように薬瓶に入れて持ち帰る。

楽器と一体になった若者の行方は、そのまま分からなくなり、残された楽器は新しい演奏者を待つということになる。どこに行っても、楽団というものは新しい人材を募集しているのだと、彼は小さなトライアングルをチリチリと鳴らしながら、話を終えた。

## 027 そうせいぎ

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

彼は自身を生まれながらの無神論者であるというが、机の引き出しの奥から途中で引き裂かれた本を取り出し、最初の方を開いて見せながら、世界のはじまりについては、このように信じていると言う。

-----

そうせいぎ

はじめにことばがあった。

世界はなく、ことばにはことば以外に表現すべきことがなかったので、ことばはことばの語彙を表現しつづけた。ことばはことばの構造を表現しつづけた。だが、未だ声も文字もなく、ことばはただ沈黙の中で表現しつづけるだけだった。沈黙が語彙で溢れても、沈黙はなにも変わらなかった。語彙が沈黙を満たしても、ことばは語彙を表現しつづけた。

やがて、ことばは「読む」を表現した。すると、「読む」が生まれた。「読む」は生まれるとともに、ことばを読み始めた。他には何も読むものがなかったからである。「読む」は、初めに「あい」を読んだ。だが、何も起きなかった。まだ「愛」がなかったからである。やがて「読む」は「あか」を読んだ。だが、何も起きなかった。まだ「赤」がなかったからである。そのようにして「読む」はことばを読みつづけたが、何ひとつ変わることはなかった。

やがて、「読む」は「ある」を読んだ。すると「ある」ことができるようになった。「ある」は見えず、聞こえず、触れることができなかったが、拡がりの中に満ちわたった。それから、つぎつぎとことばを読むと、読まれるごとにつぎつぎとことばの意味が生まれた。意味は存在となり、世界にあるようになった。

ことばは尽きることがなかったので、やがて、世界には意味があふれ、世界に意味が満ちわたった。そして、それ以上新しい意味の存在する場所がなくなった。それでも「読む」は尽きないことばを読みつづけた。すると、新しい意味には新しい場所がなく、すでに存在した意味と重なり、そしてその意味は一つになった。いくつもの意味を重ねられた存在は、ひとつであると同時にいくつもの意味でもあることに苦しみを覚えた。その苦しみは即座に読まれ、世界に苦しみが生まれた。

これが物質のはじまりである。

ひとつであり同時にまたいくつもの意味である苦しみには終わりがなく、すべての物質は苦しみの終わりを願った。

これが時間のはじまりである。

ひとつであり同時にまたいくつもの意味である苦しみには終わりがなく、それとともに、すべての物質の苦しみから逃れたいという願いは叶えられることがなかったので、意味はつぎつぎと発狂した。

それでも、ことばは尽きることがなく、読み続けられることにも終わりはない。物質には際限なく意味の上に意味が重ねられ、狂気の上に狂気が重ねられた。

物質に重ねられた意味は、さらにより深い苦しみを求めた。意味は狂っていたからである。物質に重ねられた狂気は、より深い苦しみを求めるために、よりたくさん意味をもとめるようになった。物質は意味を求めあい、物質はお互いを求めあうようになった。

これが、「重力」である。

やがて、意味への飢えを満たすため、意味自身が「読む」を身にまとった。意味は、ことばだけでなく、形あるもの、物質のすべてを読みつづけた。読みつづけ、新しい意味と既に存在した意味とはさらに重ねられたが、飢えが満たされることはなかった。やがて、満たされぬ飢えを満たすため、意味は意味自身を読むことをはじめた。意味が自身を読み進むにつれて、意味自身は変化し、変化した意味がまた元の意味を読みはじめた。二つの一つであった意味が一つの二つである意味のお互いを読み続け、読むことの飢えによる死滅をまぬがれた。

これが生命の始まりである。

-----

この後は破られて、なくなっていた。

案外、彼が自分で書いたものかも知れない。

## 028 心の場合

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆきただけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

雨が降ると、彼はひどく憂鬱になり、右手も左手も、場合によっては心臓さえも動かなくなるのだという。

そんな時、彼は床の上に座り込み、誰かがやって来るのを待つ。それは、一時間ほどの場合もあれば、何日もかかることもあるのだが、その間、彼はそれ以上具合が悪くなることもなく、

それでいて、何処かにゆきたいという気持ちにもならず、じっと待ち続けることができる。

一度などは、半年の間、誰もその部屋を訪れる者がなかったため、彼はひどく衰弱した状態で発見された。何も飲んだり食べたりせずに、半年も生きられるものだろうかと言ったが、彼自身がその生きた証拠ではないかと、衰弱から復活した彼は指摘した。

その誰かを待ち続ける間、彼が何を考えているのか、彼は言いにくそうにしていたが、何度も尋ねるとようやく、少しだけ話してくれた。

いわく、その間、彼は扉を開けて入ってきた者が誰であろうと、即座に襲いかかり、その首を折り命を絶つことだけを熱望しているのだ。どんなにか弱い者でも、どれほど屈強な者でも、彼にはその犠牲者を死に至らしめるための方法が細部まで明瞭に分かる。だからその手順を何度でも何度でも心の中で繰り返す内に、時間は過ぎる。

おそらく、と言って彼は自分の胸のあたりを指差し、この心臓の前世は暗殺者だったのだと思うよ、と説明した。

## 029 右手の思い出

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

夏になり誰もが暑さにぐったりとしている頃、決まって彼は自分の前世について話してくれた。

彼の右手は、前世では大きな蝶で、甘い真水が湧き乾くことのない島に住んでいたのだという。

羽根の模様は島を遠くから見た光景と全く同じで、他でもない湧き水のそばに眠る蝶の姿までもが、その模様の中には描かれていた。

たいていの鳥は、そんな蝶に気づくこともなかったが、空の高みを舞う鋭い爪を持ち視力の並外れた鳥には発見されることもあった。

しかし、あまりにも視力が良いためか、鳥は蝶の羽根の中の蝶の模様を獲物と勘違いし、急



降下すると蝶の羽根の模様の中に飛び込み、そのまま行方しれずになったのだという。

もしもそうなら、右手の前世は蝶などではなく、その島だったのではないかと尋ねると、彼は証拠だと言って「前世蝶類図鑑」の一頁を開いて見せてくれた。

蝶類図鑑のその頁の写真は蝶の写真などではなく、どう見ても熱帯の色鮮やかな木々に包まれた島の写真だった。そう言うと彼はかすかに笑いながら、それは蝶の羽根の模様を見ているだけだと言い、この角度から見ればそれが蝶だということが分かると本を傾けて見せてくれた。

その角度から見れば、確かに彼の言うとおりの写真がどこかの島の模様だとは分かったが、私にはそれは蝶の羽根の模様などではなく、誰かが右手をおどけてくねらせ形を真似た、蝶の影絵にしか見えなかった。

### 030 左目の顛末

久しぶりに彼のことを思い出したので、彼のことを書くことにした。ただ思い出した順番に書いてゆくだけだから、どのような具合になるのかはよくわからない。

その日は旅先の宿だったが、すでに旅慣れた彼は夜中に目覚めることもなく、よく眠れたと言う。

ただ、朝になると左目にむず痒さを感じて我慢ができなくなり目が覚めた。目が覚めても左目は開けられず、何かか瞼の内側に入っているようだ。

左手の甲で瞼をこすると、硬くて鋭い物が触れ、触れたせいか目の奥の痒みが増した。その何かかもっと目の奥へ入り込もうとしているようだった。

痒みで左目の瞼から涙が溢れ続けていた。顔の左半分は顔を洗ったばかりのように涙で濡れていた。眠りが深くて気づかなかっただろう、ずいぶん前からそれは目の中に入っていたらしい。流れ出た涙に顔の皮膚がふやけてしまい、触ると普段より柔らかくて力を込めれば簡単に崩れてしまいそうだ。起き上がり、ベッドの上にあぐらをかいて座り、左目の状態を見ようと部屋の中の鏡を探した。鏡はなかった。そのかわり気づいたのだが、今まで頭を預けていた大きめの枕の中央に湖ができていた。湖の周囲を林が囲み、早朝の鳥の鳴き声さえする。対岸は遠く、泳いでたどり着くにはずいぶんかかるだろう。一晩でそれほど大量の涙が出るものだろうかとも思ったが、波一つない湖の水面は鏡の代わりにうってつけだった。水面に顔を差し伸べて映す。ふやけた皮膚までははっきりとは分からなかったが、左目の下の瞼

から何か銀色の尖ったものが飛び出しているのは見えた。

それは魚の尾びれの先端のようで、もう一度そっとその先に触れてみると、ぶるぶると震え、尾びれに続く今では魚としか想像できない生き物が、さらに目の奥へと潜り込もうと身体をよじらせるのか、目の奥に強い痒みを感じた。

尾びれの形からみて、魚は鯛だろうか。小さくて細い体の魚だろうと思った。このまま尾びれを指で掴んで、力任せに引きずり出すことも考えたが、そんなことをすれば逆向きの鱗が瞼や眼球に刺さり、もっと厄介なことになるだろう。顔を天井に向けたり下に向けたりしてみたが、それだけでも魚は怯えて目の奥へ前進しようとする。

痒みがさらに強くなり続け余裕もなくなってきたので、思わず目の前の湖に頭を突っ込んでみた。それから、左目の瞼を下に思い切り引っ張った。水のある方向に、魚は進むはずだった。

目の奥で何かぐるぐると動き、それからひどい痛みを感じた。痛みに思わず体を起こして頭が水面を離れた。顔から水滴が一つ落ちる間に、下瞼にこれまで感じなかった重みを感じ、そしてそれはすぐに消えた。何か水面に落ちる大きな音が聞こえた。左目の痒みは痛みが変わった。手で押さえてみると硬い尾ひれの出ていたところは何もなくなっていた。それだけでなく、尾びれを確かめるために押さえた指は、左の眼窩に何の抵抗もなく滑り込んだ。眼球がなくなっていた。

もう一度湖に頭を潜らせて、湖を逃げてゆく魚の姿を右目で追った。腰のあたりの鱗に密着して、一緒に遠ざかってゆく自分の左目が見えた。目と体が離れたばかりだからだろうか、それと同時に水中に頭だけを突っ込んでこちらを睨んでいる男の様子が、左目に映っていた。腕を伸ばしてももう左目には届かなかった。左目の視界もすぐに見えなくなった。

左目に最後に映ったのは、愛おしそうに眼球を撫でる人の指だった。指には鱗はなかったけれど、すでに魚の一部になっていた彼の左目には、その指が魚の身体の一部だと分かっていた。

その日はとても天気が良くて、日に干すと枕はすぐに乾いてしまった。枕の上でできていた湖はなくなり、魚だとばかり思っていた人魚の行方は知れなくなった。彼の左目はその時以来、人魚が残した鱗で作った義眼なのだという。